

# 西ドイツの旅

## ～ その第1歩～

神戸 信和

私は幸いに ドイツ連邦地質調査所 (Bundesanstalt für Bodenforschung) の招きにより 1964年度科学技術庁パートギャランティー留学生として “中古生代の層序学的古生物学的研究” の目的で ドイツ連邦地質調査所へ出張を命ぜられ 1964年12月13日羽田をたち 1カ年間の滞独研究を終えて 1965年12月末帰国した。この間に直接体験し かつ 観察することができた西ドイツでの 生活あるいは研究などについて お伝えすることができるならば幸いである。

### 日本からインドへ

雲ひとつない 快晴の12月13日 午前11時 多くのひとびとのお見送りをうけて ルフトハンザドイツ航空のボーイング720型ジェット旅客機は 羽田空港をあとに飛び立った。私にとっては はじめての海外旅行であったが 機中の人となるや 出発前の忙しさから解放されたためか 意外に心の平静を保つことができたのは幸いであった。1時間たつたかたぬかのうちに 鹿児島南端をかすめ やがて昼食 もちろんドイツ食である。目的国の航空機を最初から選んだのは 1カ年間のドイツ生活に早くなれるために ひとつのよい方法であつたかも知れない。さらに機は台北上空から中国大陸に接近 やがて 午後2時35分(現地時間) 香港に無事着陸した。空港待合室で ジュースの接待をうけながら 待つことしばし はじめてみる異国情緒に 多少の不安感と いくらかの好奇心の交錯するうちに 自分はついに 日本の国外にやってきたのだということと 日本人であるのだという自覚がよみがえってきた。

ふたたび機上の人となり 香港をあとにバンコクへと向かった。風雲ただならぬベトナムのはるか上空を 戦火の終息を祈りつつ やがて眼下に ゆうゆうと流れるメコン河の練り広げる一大景観をながめ あるいは いうさうとした密林地帯に目を転じているうちに 早く

も眼下に 整然とした水田が展開し 午後5時(現地時間) バンコク郊外にあるドンムアング空港に着陸した。

香港とおなじように 出発まで通過のため 待合させるだけであったが ここでは 旅客はみんなパスポートを一時的に 事務所に預けねばならず 返してもらうまではなんとなく不安であった。

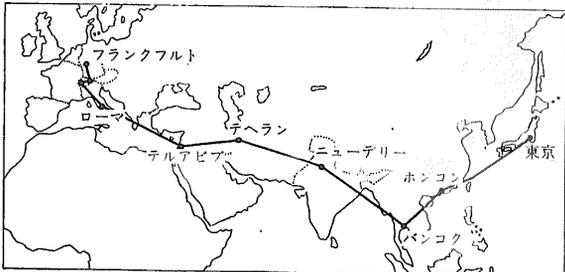
待合させ1時間 夕やみ迫つて 機はインドのニューデリーへ向けて飛び立つ。視界はまっくらやみとなった。カルカッタ上空へさしかかった頃から 機がかなりゆれた。このへんは北にヒマラヤ山系を 南にベンガル湾をひかえているため 航空上の気象があまり芳しくない と隣席の外国人が 説明してくれたのを思いだす。定刻午後8時20分(現地時間) ニューデリーの郊外にあるパラム空港に着陸した。

### 第22回万国地質学会議に出席して

インド地質学会のたくさんのひとびとの出迎えをうけたので 税関と入国手続は意外に簡単におわり ニューデリー市へと空港バスで向かった。やがて予約のしてあるクラリッジホテル (Claridges Hotel) へ到着した。

ニューデリーでの滞在は 14日から22日にわたって ビジャン・パワン (Vigyan Bhawan) 国立博物館 (National Museum) および ラグビア・シング下級高校 (Ragbir Singh Junior High School) で行なわれた 第22回万国地質学会議 (XXII International Geological Congress) に出席のためであった。

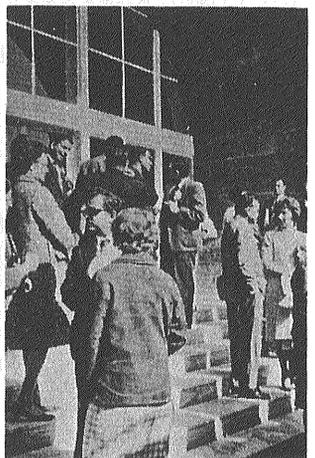
このたびはアジアで開かれた 最初の万国地質学会議であったが インド地質調査所 (Geological Survey of



第1図 日本から西ドイツへの経路



第2図 ニューデリーの (Ragbir Singh Junior High School) 前にて 第22回万国地質学会議に出席した人たち



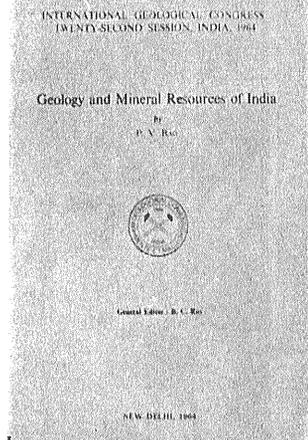
第3図 ニューデリーのビジャン・パワン (Vigyan Bhawan) 玄関前にて

India)をはじめとする インドの地質学者 地球物理学 地球化学者の最大の努力によって 世界の88カ国から参加者およそ2000人があつまるなかで たくさんの専門別分科会 各種委員会 協力学会(科学連合) さらにいくつかの野外巡検が 盛大に行なわれて ぶじ終了した。なお 下記のごとき出版物と地質図が 会員に配布された。

- 1 Provisional List of Registrants.
- 2 Programme.
- 3 Report of the Twenty-Second Session, India, 1964, International Geological Congress. Volume of Abstracts.
- 4 Group Discussions on the Geological and Geophysical Results of the International Indian Ocean Expedition Abstracts of Papers.
- 5 Definition of Geologic Systems.
- 6 P.V. Rao: Geology and Mineral Resources of India.
- 7 U. Aswathanarayana: Age Determination of Rocks and Geochronology of India.
- 8 D.R.S. Mehta: Gondwanas in India.
- 9 D.N. Wadia and W.D. West: Structure of the Himalayas.
- 10 M.R. Sahni and L.P. Mathur: Stratigraphy of the Siwalik Group.
- 11 M.S. Krishnan: Iron-Ores in India.
- 12 M.V.N. Murthy: Mica Fields of India.
- 13 L.P. Mathur and P. Evans: Oil in India.
- 14 History, Function, Organisation and Plans of the Geological Survey of India, Calcutta, 1963.
- 15 List of Publications, Geological Survey of India, Calcutta, 1963.
- 16 Geological Map of India. Scale 1:5,000,000.

この会議の内容については 出席された多くのひとびとにより すでに下記のごとく 詳しく報告されているので ご参照いただきたい。

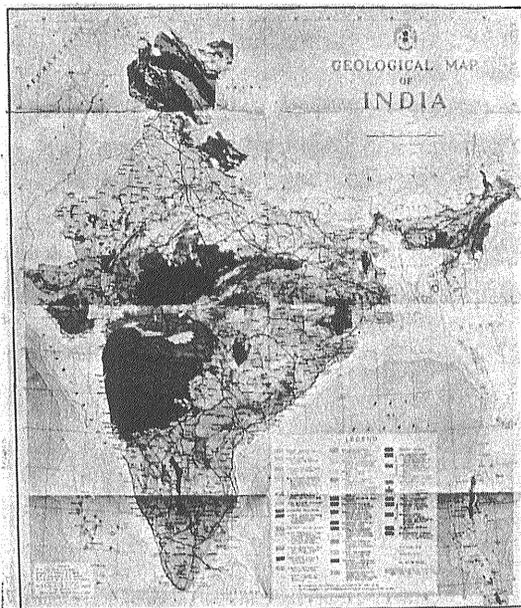
- 1 牛来正夫(1965): インドの旅 地球科学 79号
- 2 服部 仁(1965): 第22回万国地質学会に出席して 地質ニュース No. 127
- 3 服部 仁(1965): 世界地質図委員会の動向 地質ニュース No. 134
- 4 服部 仁(1965): 世界地質図委員会における討議 地質調査所月報 vol. 16 no. 6
- 5 服部 仁(1965): セイロンをたずねて 地質ニュース No. 134
- 6 市川浩一郎・千地万造(1965): 第22回国際地質学



第4図 会議に出席した会員に配布された出版物

- 会議(於インド)に出席して 地球科学 79号
- 7 東中秀雄(1965): 第22回 IGC 地球物理学に関する Business 報告 地学雑誌 vol. 74 no. 2 (745)
- 8 東中秀雄(1965): 第22回万国地質学会議一主として地球物理学に関する報告 測地学会誌 vol. 11 no. 1
- 9 小林貞一(1965): 第22回万国地質学会議に出席して 地学雑誌 vol. 74 no. 2 (745)
- 10 小林貞一(1965): 国際地学連合第2回総会 地学雑誌 vol. 74 no. 3 (746)
- 11 小林貞一・松本達郎・浜田隆士・鎮西清高(1965): 第22回万国地質学会議層位学委員会の報告 地学雑誌 vol. 74 no. 3 (746)
- 12 松本達郎(1965): 国際古生物学連合会議出席報告 化石第9号
- 13 砂川一郎(1965): 国際鉱物学連合総会に出席して 地質ニュース No. 132
- 14 砂川一郎(1965): インド Jamshedpur 周辺巡検記 地質ニュース No. 134
- 15 徳永重元(1965): 花粉学の現状と国際花粉学会 地学雑誌 vol. 74 no. 6 (749)
- 16 徳永重元(1965): インド各地の研究所をたずねて 地質ニュース No. 127
- 17 千地万造(1965): ダージリン・シッキムヒマラヤ地質見学記 地球科学 80号
- 18 渡辺武男(1965): 第4回国際鉱物連合(IMA) 第22回万国地質学会議(IGC)と 鉱床研究の最近の動向について 鉱山地質 15巻(4) 72号

このような会議に とくに世界地質図委員会 (Commission for the Geological Map of the World) とか 層位学委員会 (Commission on Stratigraphy) にはじめて出席して感じたことは 日本の地質は世界の地質に日本の地質学関係の学会は世界の地質学関係の学会に密接に関係していることがまざまざと感じられた。そして日本の地質を明らかにする研究も 日本の学者ばかり



第5図 インド地質調査所編さん 500万分の1 インド地質図 (1962刊行)

りでなく 世界中の地球科学者が いつも注目しているのだということを 忘れてはならないと思う。

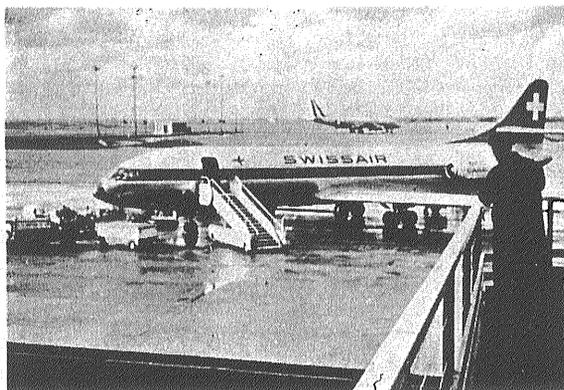
さらに 今回は日本の学術会議 大学 研究所 博物館 民間会社から19名 地質調査所から5名が出席し あわせて24名の多くにたった。これは万国地質学会始まって以来 日本としては最多数の出席者数であるといわれている。出席者を所属団体別および年令層別からみても 多岐にわたっている。いろいろの研究分野の そして あらゆる年令層の地球科学者が出席し それぞれの専門分野から このような会議にのぞんだことは 前にかかげた発表報告文にもみられるように 日本の地球科学のいろいろの研究分野に そして学会に及ぼすところ きわめて大きいといえる。

1968年8月19日～28日に チェコスロバキアのプラークで 第23回万国地質学会議が開催されるが より多くの日本の地球科学者が出席し より多くの成果をもたらすよう 願っている (地質学雑誌 72巻 2号 表紙裏 および 立見辰雄 1966 第23回万国地質学会議について 鉱山地質 16巻(1) 75号 参照)。

この会議に出席のため インドへ来られた ドイツ連邦地質調査所長のマルティニー (H.J. Martini) 博士は 会議前のカシミール地方の巡検に参加されたが 積雪のため道をとざされ 会議のおわる日まで ニューデリーへ帰られなかったので お会いできなかったのは 本当に残念だった。しかし世界地質図委員会では ドイツ連邦地質調査所のゲルトナー (H.R. v. Gaertner) 博士 やワルター (H. Walther) 博士にお会いしたので いくらか西ドイツ・ハノーバー (Hannover) の生活が 身じかに感ぜられてきた。さらに西ドイツ・エアランゲン大学のシュワン (W. Schwan) 教授 ミュンヘン大学のデーム (R. Dehm) 教授 ベルギー・王室自然科学研究所のレコンプト (M. Lecompte) 教授 イタリア・ミラノ大学のデシオ (A. Desio) 教授 イギリス・地質調査所長のスタブルフィールド (C.J. Stubblefield) 博士 副所長のウッドランド (A.W. Woodland) 博士らの 構造地質学者や古生物学者にお会して どうにかこうにか通ずる英語で話をしているうちに これから始めようというヨーロッパの生活と研究に対して いくらかでも自信がうまれていったのではなからうか。

### インドからヨーロッパへ

ニューデリーでの滞在は短い期間ではあったが いろいろ初めての体験と見聞をえて インド地質学会と インド国民の榮えを祈りながら 年の瀬もせまるころ フランス航空のボーイング 707 型ジェット旅客機で パラ



第6図 ローマ郊外にあるレオナルド・ダ・ビンチ空港

ム空港を飛びたち テヘラン テルアビブ経由で ほとんど闇のなかを飛びつづけ あくる夜明け ヨーロッパの玄関口 ローマ郊外のレオナルド・ダ・ビンチ空港 (Leonarld d' Da Vinci) に着陸した。

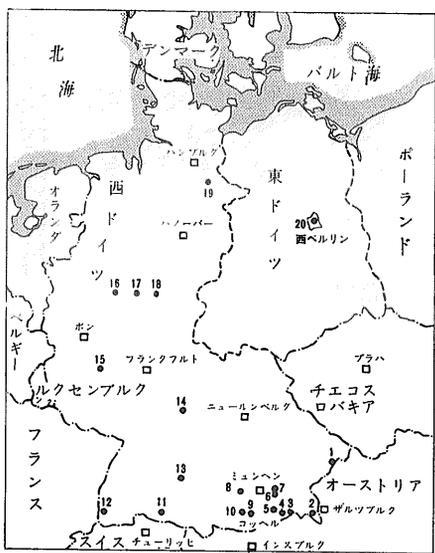
### ローマでのできごと

レオナルド・ダ・ビンチ空港について ヨーロッパへとうとう着いた安心と 2600年の歴史をもつ永遠の都ローマにきた感激もつかのまだった。というのは 空港で 私の大きなトランクとボストンバッグは 待てどくらすと届かないのだ。航空機旅行の経験すくないものにとっては 一大事である。とりあえず私の滞在中のホテル名と 荷物の型とを航空会社に知らせて 空港をあとにホテルへ向かった。

1ヵ年間の身の回りの 何から何まではいつている荷物がないので 一刻も落ちつかない。さっそく あいさつをかねて インドの日本大使館の伊勢谷三樹郎一等書記官から 紹介をいただいていた イタリアの日本大使館の三島和夫一等書記官を訪ねた。

事の次第を述べたところ 航空会社の事務所に再三再四 連絡をとってくださり その結果 その晩8時になって 私の荷物はローマでおろされずに パリまで行ってしまったが 9時ごろにはローマに帰ってくるから10時すぎにはホテルにとどけるとの連絡をうけることができた。はたして その晩11時に 私の荷物はホテルにとどいた。ローマ到着そうそうから こんなことではこの先1ヵ年どうしたものかと 不安と焦燥にかられていたがようやくあんの胸をなでおろすことができたのは 何よりのさいわいであった。その後会うひとごとに この話をするとよくあることだという。

いろいろの会議や学会に出席のため 航空機を利用する場合に ぜびとも必要な書類は 身じかにおくのが安全のように考えられたから 老婆心ながら付言する。



第9図 西ドイツ国内のゲーテ・インスティテュートの所在地(1-20本文参照)を示す

このようなできごとのため ヨーロッパの初印象をたいへん悪いものにしてしまっていたが それを償ってあまりある ローマ大学地球化学教室のフォルナゼリー (M. Fornaseri) 教授の親切について一言しよう。

それは レオナルド・ダ・ビンチ空港におり立ってちょうど 私の荷物の届くのを 焦燥にかられながら待っていると 黒みがかった髪の毛の ひとりのイタリア人らしい50才そこそこの紳士が 私のそばに近寄ってきて “日本の神戸さんですか。 ローマ大学の地質学関係の教室を見学したいご希望なのですが いつでもご案内しましょう” と言われた。 そのひとがフォルナゼリー教授であった。 私は一面識もなかったが 同教授も ニューデリーの会議に出席されて ミラノ大学のデシオ教授か あるいはアセレット (R. Assereto) さんか

ら 私がローマ大学見学の希望をもっているからよろしく ということを開かれての 親切な言葉であったと思う。 私はフォルナゼリー教授のことばにしたがって 1日ローマ大学の地球化学教室 地質学教室を見学させていただいた。 ほんとうに心暖まる 忘れえぬ思い出である。 ローマ大学見学記は 後日 イタリア および スイス地方のアルプス地質巡検記とともに お伝えする予定である。

### いよいよ西ドイツへ

年の瀬もいよいよおしつまって ローマをたち ジュネーブを経て 途中 積雪におおわれたヨーロッパアルプスの山々を機上からながめながら さらにチューリッヒから あこがれの西ドイツに向かった。 ジュラ山脈やスワビヤアルプスを越えるころ おりからの悪天候のため 機はかなりゆれた。 いつのまにか着陸準備にはいり 点々とした赤い屋根の家々が 次第に大きくなるのがわかる。 かなりの幅がある河が見えはじめた。 ライン河であろう。 とかくするうちに家並みの整った町々が手にとるように近づいてきた。

やがて西ドイツの玄関口 人口67万をよろし 詩人ゲーテの生地として知られ マイン川にそった 歴史の都 フランクフルトの郊外にある空港におりたった。

フランクフルトにはドイツで屈指の自然科学博物館である ゼンケンベルグ博物館 (Naturmuseum Senckenberg) があり “Natur und Volk” と “Senckenbergiana” の学術雑誌が刊行されている。 そのほか ゲーテ大学 (Johann Wolfgang Goethe Universität) 植物園 (Palmengarten) 動物園 (Zoologischer Garten) などがありよく知られている。

フランクフルト空港では一昨年 科学技術庁のまねきにより 6ヵ月間 地質調査所へ留学した ドイツ連邦



第7図 ホルナゼリー (M. Fornaseri) 教授 ローマ大学地質学教室玄関前にて



第8図 ローマのサン・ピエトロ広場からながめたサン・ピエトロ大寺院向って右手にパチカン宮がある

地質調査所のザームス (C.W. Sames) 博士の出迎えをうけ 再会を互いに喜んだ。

入国管理および税関ともに意外に簡単で 入国はパスポートをみせるだけでパス そしてあなたが もし必要ならば入国日付印を押しましょう というごく簡単なものだった。私は入国の記念スタンプ (der Erinnerungstempel) として とにかく押しもらった。税関も “関税のかかるものは何かもっていませんか” (Haben Sie etwas zu verzollen?) ときかれるだけだった。

長期間の滞在の場合には 居住地の警察署に滞在許可願を提出して 滞在許可 (Aufenthaltslaubnis für Bundesrepublik Deutschland) の印を パスポートに押ししてもらわねばならない。短期間の場合でも 一ヵ所に滞在するときは居住届をだす必要があるから 出発前には在日ドイツ大使館に 到着後は日本大使館か 領事館にさもなければ 現地の市町村役場に問い合わせることをおすすめする。

### ドイツ連邦共和国

第二次大戦後 ドイツの国土は東西に2分され 西部は一般に西ドイツとして知られ ライン河にそうボン市を首都とし ドイツ連邦共和国 (Bundesrepublik Deutschland) と言われる。ドイツ連邦共和国は10州からなり 1949年5月23日基本法 (憲法) が成立した。各州はそれぞれ憲法 議会 政府をもち 中央国家である連邦と密接な関係にある。

ドイツ連邦共和国の人口は西ベルリンの2,180,000人を含めて56,950,000人で 面積は西ベルリンの500km<sup>2</sup>を含めて248,500km<sup>2</sup>である (理科年表1965年による)。

### ゲーテ・インスティテュート (Goethe-Institut)

まずコッヘル (Kochel) へ 私は西ドイツへの入国そうそう ドイツ連邦地質調査所外部部長のチザルツ (A.

Cissarz) 博士の指示にしたがい 2ヵ月間ドイツ語を学ぶために ミュンヘンの南80km ちょうどアルプス北辺の山村コッヘル (Kochel) にあるゲーテ・インスティテュートへ行くこととなった。

新学期の講義は1月4日から始まるというので 2日の晩にコッヘルにつき ザームスさんとともに駅前のゲストハウス “アルペンローゼ” (Gästehaus “Alpenrose”) に泊まることとなった。日本にも旅行者のために ホテルとか旅館があるように 西ドイツでもホテル (Hotel) ペンション (Pension) ガストハウス (Gasthaus) などに分かれており 設備がそれぞれ違い 2日3日の宿泊なら Hotel が適当である。長期にわたるときはペンションかガストハウスが格安で 最適と思う。

コッヘル周辺の地質 周辺には氷河湖だといわれる美しいコツヘル湖 (Kochel See) や ワルヘン湖 (Walchen See) をいだし アルプス北辺の1000mないし2000m級の山々がせまっている。ミュンヘン市を流れる有名なイザール (Isar) 河の源もさほど遠からぬところである。

オーストリア領のインスブルック (Innsbruck) の東方には二畳系 (Quarzit-und Sericitschiefer) や片麻岩類 (Paragneiss und Orthogneiss) などを含むグレーワッケ帯 (Grauwacken Zone) と 中央アルプス結晶片岩帯 (Zentralalpines Kristallin) が横たわっている。その北にはアルプス相の三畳系 ジュラ系 白亜系などを主とする東アルプス帯 (Ostalpine Zone) があり その北辺はザルトツブルク (Salzburg) やコッヘルに及んでいる。さらに北側には 幅せまく上部白亜系を主とする東アルプスフリッシュ帯 (Ostalpine Flysch-Zone) がある。これらの帯はいずれも東西性の帯状構造をもって分布するのが特徴である。

これらのいわゆるアルプス帯の北方には ミュンヘンを中心にして モラッセ盆地の漸新統や中新統が広く分



第10図  
南ドイツのコッヘル駅頭にて ドイツ連邦地質調査行のザームス (C.W. Sames) 博士



第11図  
コッヘル駅前 ゲステハウス “アルペンローゼ” (Gästehaus “Alpenrose”)

布する。モラッセ盆地の南部の谷間をうずめて ギュンツ (Günz) ミンデル (Mindel) リス (Riss) ヴュルム (Würm) 各氷期の氷堆石 (Moräne) が分布するものこの辺のみのがせない 重要な地質である。南独の1月 2月といえは零下20度にさがることもしばしばで積雪も多く 地質研究などは とうてい及ばなかったがそのような地質にかこまれて ドイツの地質学を知るための基本となるドイツ語 (das Deutsche) を学ぶことになったのは 何かの奇縁であろう。

冬の コッヘル 明るる3日は日曜日で ゲーテ・インスティテュートは休みであったが 午前中にゲーメスさんが電話してくださり すでに私のために下宿が一部屋用意してあることもわかり ほっとした次第である。昨夜から降りつづいた雪は 周辺のアルプス北辺の山々をはじめ 並ぶ家々の屋根 木々の枝に 厚く降りつもり まさに銀世界 はじめてみる南独の冬景色であったが 申分のない“美”の象徴として讚美した。

今にでも“サンタクロース”に出会うのではないかと 村の静かな道を歩いていると ひとりの日本人らしい青

年にあった。こちらから声をかけると 彼もゲーテ・インスティテュートで勉強するためにきたという。何となく心強くなった。彼との会話をきいていたゲーメスさんは 半年ぶりに日本語をきいたとって 日本での生活をなつかしがっていた。

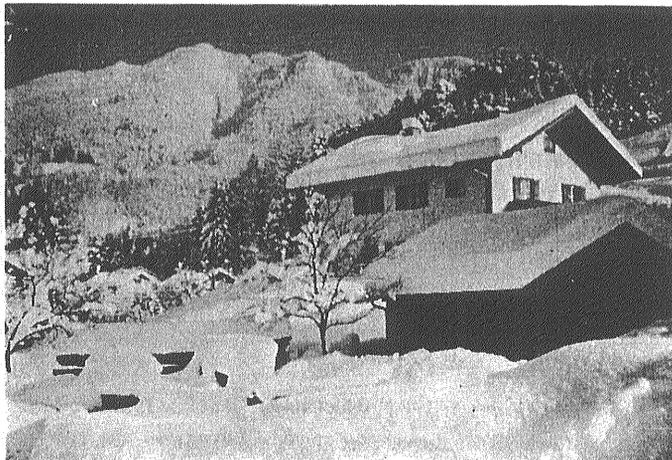
外国語について感じたこと 海外へでると 衣食住の変化も著しく 食事などはなれるまで かなり閉口するもののひとつである。それに負けず劣らず こまるのが言葉である。羽田を一步外へでると 日本語ではなにひとつ用が足せない ということをややというほど知らされた。

最近 は たくさん外国人が日本を訪れるようになり 語学勉強の必要性は だんだんと高まってきてはいるが まだ アクセサリー的な感がないでもない。しかし 一步国外へでると そうはいかない。外国語を話すことが生活に直結しているから 誰しも必死にならざるをえなくなる。

へたな英語だからなどといって 体裁を気にして 引きさがってはいられない。 “きゅうすれば通ずる”と



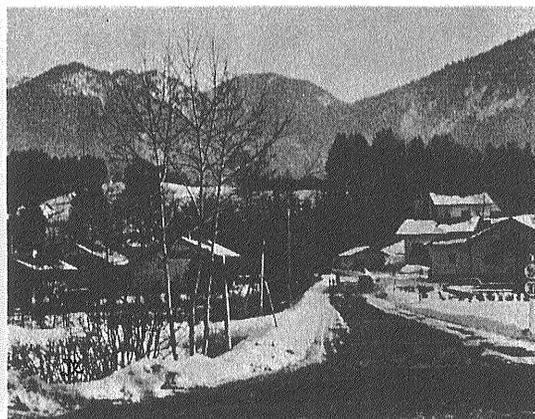
第12図 コッヘルの下宿のハンス・リープル (Hans Liebl) 夫妻



第13図 雪におおわれたコッヘルの下宿 (ハンス・リープル家)



第14図 コッヘル の 教会



第15図 コッヘルの下宿付近の家並みと アルプス北縁の山々

という言葉があるが まさにその通りで 外人の前で辞書をひいても 紙きれに書いても 聞きかえしても 笑われずにすんだ。 聞きかえさないで わかったと思って間違っただけをすることの方が 笑われる結果をまねくのである。 語学のへたなのを苦にして 外国旅行をちゅうちょする人が たくさんあるが そのような人には 必ず外国旅行に飛びだされることを おすすめする。

コッヘルの下宿へ 4日も朝から雪が降っていただろうか。 とにかく2日分の部屋代 14ドイツ・マルク (DM 西ドイツ通貨 1DM=1 Deutsche Mark は邦貨90円に相当)と朝食代2食分7ドイツ・マルク (パン パター ジャム ゆで卵 コーヒーで 普通1食2~2.5 ドイツ・マルク ほかにハムなどを注文すると高くなる)を払い ガストハウスをあとに 午前9時にゲーテ・インスティテュートへはじめて行く。 まず1人1人呼ばれて 下宿の割当があり グラーゼックストラッセ (Graseckstr.) 21のハンス・リーブル (Hans Liebl) 家ときまった。 この割当には2人の先生が いろいろとドイツ語でたずねて下さったが ほとんどわからなかった というのが正直な告白であろう。 下宿の名は紙片に書いて下さったので わかったのである。 ドイツ語が通じないので こちらは大分まごついたが 先生方はちっとも心配のようすはない。

午前中にリーブル家をたずねると 50才代の典型的なドイツ婦人の奥さんに迎えられて 今朝から待っていたという。 玄関から入って正面の 日本式にいうと 六畳位の1人部屋があてがわれた。 やっと落ちつくことができたが 2カ月間の勉強がひかえているので 益々身と心の緊張が寒さとともに加わるおもしろい。

ゲーテ・インスティテュートの紹介 このへんでゲーテ・インスティテュートを簡単に解説しよう。 ここはドイツ語 ドイツ文化普及機関で 南ドイツのミュ

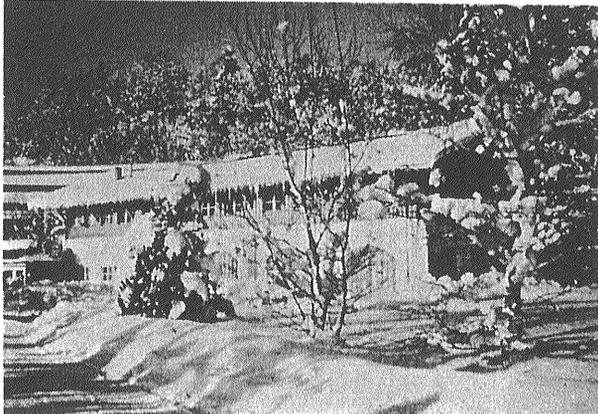


第16図 コッヘルの下宿付近を通るこの大通りは ミュンヘンからコッヘル ミッテンワルドを通り インスブルックへ通じている

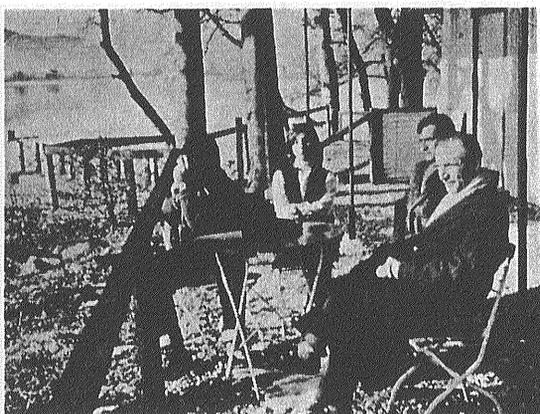
ンヘンに本部 (Goethe-Institut Abt. Unterrichtsstätten: 8 München 2 Lenbachplatz 3/I Deutschland [West Germany])をおき 世界の各地に支部があり その数は105に達している。

日本では東京支部は 千代田区飯田橋2-11 曙ビル内に 大阪支部は 北区堂島浜通り1-25 新大阪ビル9階にある。 西ドイツでは 下記の20カ所にある (地名の前の番号は 地図上の番号である。 第9図参照)。

- 1 パッサウ (Passau)
- 2 バード・ライヘンハール (Bad Reichenhall)
- 3 アヘンムーレ (Achenmühle)
- 4 ブランネンブルク (Brannenburg)
- 5 バード・アイブリング (Bad Aibling)
- 6 グラフィング (Grafing)
- 7 エベルスベルグ (Ebersberg)
- 8 グラフラート (Grafrath)
- 9 コッヘル (Kochel)
- 10 ムルナウ (Murnau)
- 11 ラドルフゼール (Radolfzell)
- 12 スタウヘン (Staufen)
- 13 ブラウボイレン (Blaubeuren)
- 14 ローテンブルク (Rothenburg)
- 15 ボパルド (Boppard)
- 16 イゼルローン (Iserlohn)



第17図 コッヘル湖に面した美しいところにあるゲーテ・インスティテュートIIの教室



第18図 コッヘル湖のほとりでいこうトルコの男女学生たち



冬期(10月から4月)は光熱料として月に35ドイツ・マルクを追加する。採用される学生数は限られているから応募は講義をうけようとする4カ月～6カ月前にミュンヘンの本部に申し出なければならない。本部から許可がおりると8週間の費用を講義の4週間前までに送る必要がある。講義の期間は毎年多少の変更がある。1月—2月 3月—4月 5月—6月 7月—8月 9月—10月 11月—12月を会期とする場所と2月—3月 4月—5月 6月—7月 8月—9月 10月—11月 12月—1月を会期とする場所とがあり毎年多少とも変更があると考えられるから費用や送金方法とともにミュンヘンの本部へ直接か東京支部あるいは大阪支部に問合せをいただきたい。

私は昨年(1965年)1月と2月の2カ月間をこのようなコッヘルでのゲーテ・インスティテュートの環境のなかで過ごすこととなった。コッヘルには校長以下11名の先生がおられ1名ないし2名の先生が20名前後の1クラスを担当し徹底したドイツ語の再教育をうけることができた。私の担任はワグナー(Wagner)先生で2カ月間を通しての教育はドイツ語を他民族に徹底的に理解させるのだという情熱と熱意にあふれるものであった。下宿では終始リーブルご夫妻の親切に接することができた。ゲーテ・インスティテュートでは日本 韓国 タイ インド イラン アフガニスタン トルコ フランス スウェーデン ノルウェー リビア カメルーン 南アフリカ共和国 ペルー パラグアイ アルゼンチン 北米合衆国など世界各国の学生とも交友の機会があった。

ミュンヘンへの一日旅行 コッヘルでの仮装舞踏会



第21図 コッヘルにて パラグアイ インド カメルーン フランス 日本の学生たち

(Kostümfest) あるいはインスブルックを北米のスペンサー(Spencer)君やタイのシジー(Sidhi)博士とともに訪ねたことなどは良き思い出となった。

このようなコッヘルでの数々の体験はドイツ人がいかに旺盛な精神力と実行力をもっているかを知る良い機会でありまたドイツ人の厚い人情とドイツの季候 風土に接する絶好の機会であった。

ゲーテ・インスティテュートの組織をふりかえってみると2カ月ごとに1コースを終了する学生はコッヘルだけでも200名におよんでいる。正確な数字はわからないが毎年西独にてゲーテ・インスティテュートで学ぶ学生数はおそらく数千名からあるいは万を越えるものと考えられる。これらの学生の多くは1年から5年あるいは10年の長い間西独で学びそして西独で就職しあるものは本国に帰ることになる。

このように数多くの外国人学生にドイツ語を徹底的に修得させそして大学で学ばせ就職させることはとりもおさずすみやかにドイツの国情を理解させさらにドイツのあらゆる文化を理解せしめるのを容易ならしめていると思う。多くの場合 自国に帰ってからはドイツの文化を効果的に伝えるということになる。

このような観点からゲーテ・インスティテュートの果たす役割りは多岐でありかつ重大であるといえよう。

西ドイツの文化あるいは科学の世界における発展のかけにゲーテ・インスティテュートの存在することを忘れてはならないであろう。

いよいよ2カ月間のコッヘルの忘れがたい生活に別れを告げて2月26日早朝ミュンヘンに向かいドイツ連邦地質調査所のあるハノーバーに行くこととなった。

(筆者は地質部)



第22図 インスブルックの町並とアルプスの山々